

平成三十年十一月二十三日 正信寺報恩講 法話

極樂往生について

釋英和

【はじめに】
本日は、お忙しい中お繰り合わせいただき、お参りいただきまして、ありがとうございます。お盆の時期は、例年になく早い梅雨明けを迎え、暑い夏でしたが、それも過ぎまして、あつという間に、報恩講を迎えることになりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

本日は、阿弥陀経の教えに沿った、樂往生についてお話しさせていただきたいと思えます。

【鳩摩羅什】

夏のお盆の法話で、浄土というのは鳩摩羅什という三蔵法師がサンスクリット語のスカヴァーティを翻訳するときに、訳語として発明したという話をさせていただきました。

ベースボールという英語を正岡子規が明治時代に野球と翻訳したようなものだと思います。

ちなみに、三蔵法師というのは、孫悟空の話に出てくる玄奘三蔵のことだと私も思っていました。実は、固有名詞ではなく、仏教における経蔵、律蔵、論蔵に精通した人のことです。それが転じて、経典をインドから持ち帰り翻訳したお坊さんのことを三蔵法師というようになったともいわれています。

鳩摩羅什は、西暦三四四年に中央アジアのクチャに生まれました。西域と呼ばれる地域で、現在は、中国の新疆省です。

七歳の時に、母とともに出家しました。教育熱心な母は、羅什を名僧バンズダッタのもとで勉強させ、十二歳くらいまでに大乘小乗の仏教経典だけでなく、バラモン教まで学び、その名声は中国の都長安まで響いていたといわれます。

五十一歳の時、後秦の国王に国師として長安に招かれ、仏典翻訳に勤しみます。全国から集められた八百人の優秀な僧を助手として、「阿弥陀経」、「法華経」、「般若経」、「維摩経」、「大智度論」、「中論」など、五十九歳で没するまで、三八四巻の訳本を完成させます。

羅什は仕事場で突然生涯を閉じたといわれています。激務だったと思いますが、素晴らしい生涯だったと思います。

それにしても、羅什はクチャの母国語とサンスクリット語、漢語を正確に理解していないと、仏教の哲学的な意味合いを伝えることができません。私たちに置き換えると、日本語を母国語としながら、英語の文献を中国語に正確に、中国人が感動するように翻訳するようなものなので、すから、その苦労は大変なことだと、感じていただけるのではないのでしょうか。

【経典の翻訳作業】

仏教の経典に古訳、旧訳（くやく）、と新訳があるのをご存知でしょうか。

キリスト教に、旧約と新約聖書がありますが、これは、キリストが生まれる前の教えを旧約、キリストが生まれてキリストの布教の様子や奇跡を起こした内容が書かれているのが新約聖書です。「訳」の字が「約」になっていることからわかるように、キリスト教は神様との契約なので、約の字を使います。

仏典は、翻訳した時代のことを言うので、「訳」の字を使います。古訳は、仏教が中国に伝来した当時のもので、翻訳に携わった人がわからないものです。

鳩摩羅什が翻訳してからは、旧訳と呼ばれ、効率よく翻訳するため役割分担を行い、その担当者の記録が残っているものを指します。翻訳する作業場を訳場といえます。訳場は訳経道場の意味です。訳経事業は国王の保護のもとに行われることが多かったので、訳場は大寺院だけでなく宮殿禁苑内にも置かれました。

玄奘三蔵は、鳩摩羅什が訳した音写が、サンスクリット語に忠実でない、あるいは、意味が忠実でないとして、新たに翻訳をしました。玄奘三蔵以降の翻訳を新訳といえます。

旧訳と新訳の違い

サンスクリット語	旧訳	新訳
samaadhi	三昧(さんまい)	三摩地(さんまじ)
yojana	由旬(ゆじゆん)	踰闍那(ゆじゃな)
sattva	衆生(しゆじよう)	有情(うじよう)

確かに、玄奘三蔵の新訳の方が、サンスクリット語の音に近いようです。また、sattvaは、心あるものという意味ですので、衆生より有情の訳が近いように思います。

羅什が翻訳した頃の南北朝時代の漢字の発音と、玄奘の唐時代の発音が違うので、このような差が出たという学説もあります。

翻訳の役割は九種類の分担があり、間違いが生じないように、そして、読み物として格調高くするための役割までありました。

- ・ 訳主(やくしゆ) 梵語で記された経典を讀上げ、漢語に訳す役。
- ・ 証義(しょうぎ) 訳主の左側で、訳が適切かどうかを判定する役。
- ・ 証文(しょうもん) 訳主の右側で、訳主の讀む梵文に誤りがないかを確認する役。
- ・ 書写(しよしゃ) 梵文を聞いて、梵語の発音をそのままを漢字に写す⇒音写する役。
- ・ 筆受(ひつじゆ) 訳主の訳した言葉をそのまま筆記する役。
- ・ 綴文(てつもん) 筆受した漢文をより漢文らしい形に直す役。
- ・ 参訳(さんやく) 梵文と漢文を比べて誤りのないようにする役。
- ・ 刊定(かんじよう) 冗長の文を削つての意味を定める役。
- ・ 潤文(じゆんもん) 訳した文を潤色する役。

【阿弥陀経に書かれた浄土】

阿弥陀経には、お釈迦さまが、弟子の舍利弗に向かって、浄土について説かれている様子が書かれています。「舍利弗」と三十六回も語り掛けています。大きく四つの内容が書かれています。

- (一) 極楽浄土の世界のありさまについて
- (二) 極楽浄土の主、阿弥陀仏について
- (三) 念仏による救い
- (四) 六方の諸仏

極楽浄土の世界のありさまに関して、簡単にまとめると、次のようなことです。

- ・ 極樂は、ここを去ること十萬億の利(国土)のあなた、西方にある
- ・ 地獄、餓鬼、畜生などが存在しない 四季もない
- ・ 国土は七宝(金・銀・瑠璃・玻璃・磲磈・珊瑚・瑪瑙)できている
- ・ 七宝の樹木で飾られ、優れた天の音楽が流れ、宝樹が風に吹かれて良い音を出す

- ・ 一本の巨大な菩提樹がある

- ・ 山もなく海もないが池がある(水浴の池、蓮池、宝池)

凡夫のために、極樂浄土が素晴らしい場所であることを説法されると感じます。なんだか、旅行のテレビ番組で、風光明媚なリゾート地を紹介しているようですね。

さて、お釈迦さまが、舍利弗を含め千二百五十人の弟子に「阿彌陀經」の内容を語った場所は、「祇樹給孤獨園(ぎじゆきこどくおん)」という場所です。これを縮めて言うと、祇園精舎のことです。京都の祇園をはじめ、全国に祇園という地名があります。その多くは、繁華街や商業施設があるところが多いようです。

祇樹給孤獨園は、お釈迦様の故郷コーサラ国に、祇陀太子が樹(建築材料)を、給孤獨というお金持ちが園(土地)を寄進して建てられたことから命名されたといわれています。

【極樂浄土という場所】

ここを去ること十萬億の国土のあなたということ、かなり遠いところにあると書かれています。

実は、お釈迦さまが、ブツダガヤで悟りを開いたとき、極樂浄土に往生するという子を考えていなかったと思います。

涅槃に達するのは、一切の煩惱から解脱し、不生不滅の高い境地といわれています。縁起の法則を理解し、苦を滅することが涅槃すなわち極

樂なのです。ということ、涅槃は自分の心の中にあり、遠いところにあるという考えにはならなかったと思います。

反面、遠いところにあるということは、自分では到達できないという意味で、他力にすがるより到達するより手立てがないというように解釈することもできます。

【阿彌陀佛について】

阿彌陀經には、浄土の主人である阿彌陀佛は光明無量、寿命無量の仏様と書かれています。これは、智慧の働きが無量で、いつまでも続くという意味に捉えて良いと思います。

また、阿彌陀佛の寿命と仏国土にいる人の寿命も限りなく、既に、十功という長い時間が過ぎていと書かれています。

生病老死という苦を乗り越えた永遠の命を、仏国土では与えてくださる阿彌陀佛は、慈悲の力も限りないという意味です。

阿彌陀佛に導かれる極樂浄土に行くと、苦のない世界に生まれるということ、です。

「あるいは一日、あるいは二日・・・あるいは七日、一心不乱に念仏すれば、臨終のときに、阿彌陀佛が多く菩薩とともに現れて、極樂浄土に生まれさせてくださる」と説かれています。これを、自力の念仏と捉える人もいますが、一心不乱に念仏するということに、二心なく本願を一筋に信じると、救われるという意味が含まれています。

煩惱から解脱できれば、悟りの世界(涅槃||極樂浄土)に達することができると仏教では考えます。したがって、生きている間に往生しようと修行に励む宗派もあります。

しかし、凡夫は、念仏によって阿彌陀佛にすがり、臨終のときに即徳

往生する考えになると、極楽浄土が死後の世界と認識されるようになってきたのだと感じます。

【極楽浄土に生まれるとどうなるのか】

極楽浄土に生まれると、煩惱から解放され、苦を味合わないということなのですが、この状態をイメージするのは、なかなか難しいと思います。言葉にすることは、更に、難しいと思います。

それを分かったうえで、説明してみます。

今病気や怪我で苦しんでいる人は、極楽浄土に往生すると、その痛みや苦しみから解放されるというのはわかりやすいと思います。

女性の方と話していると、息子の嫁と一緒に墓では嫌だとか、先祖代々の墓に入りたくないという話題がでることがあります。

念仏を唱えて極楽浄土に往生してしまつた人は、煩惱から脱却していきなから、嫌いか好きとかいう執着する概念がないと思います。この世では、本当に嫌いだつた舅姑が隣にいても、何も感じないのが極楽浄土なのではないかと思ひます。

永遠の寿命があれば、会いたい人にも会えると思ひますし、会いたくない人に会つても、いやに思わないということなのでしょう。

極楽浄土で永遠の寿命が与えられると、私には、却つて退屈なような気持ちになります。この法話の内容を考えなければと思うのも、報恩講という期限があるからだと思います。

年を取ると体力が落ち、気力がなくなつて面倒になるから、今のうちからボケ防止のために、勉強したり運動したりする気力を奮い立たせることがあるのですが、無限の命があり、無限の知恵があれば、どうした

ら努力できるのか、なかなか理解できません。しかし、こうした努力がなくても智慧があふれ出るので、締切や結果を気にしなくてもよいのかもしれません。

【末法思想と極楽】

末法思想とは、お釈迦様が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる時代（正法）が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない時代（像法）が来て、その次には人も世も最悪となり正法がまったく行われない時代（法滅＝末法）が来る、とする歴史観のことです。

残念ながら、現代の科学中心の世界では、産業革命が起き、高度経済成長があり、IT による情報革命がおこり、AI が発達すると知識も人間を超えるような発展史観です。でも、金儲け主義で、謙虚な心や倫理観、更に報恩感謝の心が不足している末法なのではないかと感じます。

阿弥陀経の中では、五濁悪世という表現で、末法を嘆き、煩惱を抱えた凡夫は、阿弥陀仏よりたまわつた正しい智慧と不可思議な功德を信じるよう、無数の諸仏が薦めておられると説かれています。

五濁悪世の五濁とは、次のようなことです。

- ・ 劫濁（こうじよく）時代の汚れ。飢饉や疫病、戦争などの社会悪が増大すること。
- ・ 見濁（けんじよく）思想の乱れ。邪悪な思想、見解がはびこること。
- ・ 煩惱濁（ぼんのうじよく）貪（とん）・瞋（じん）・痴（ち）等の煩惱が盛んになること。
- ・ 衆生濁（しゅじょうじよく）衆生の資質が低下し、十悪をほしいままにすること。
- ・ 命濁（みょうじよく）衆生の寿命が次第に短くなること。

五濁悪世を文章にすると、極楽浄土とは全く逆のことが發生していると、お釈迦さまが嘆いているように思います。

阿弥陀経の最後では、お釈迦さまは、こう語ります。

「この濁りに満ちた悪世にあつて、難しい事を成し遂げて、仏となり、あらゆる世の人々のため、この信じるのが難しい法をといたのです。難しい事でした。」

【極楽浄土を信じるのは難しい】

親鸞聖人も、聖道門である、専修念仏の易行が最も浄土に達しやすいが、信じるのが難しいと教行信証の中で何度も述べています。疑いなく、すなわち、二心なく一心に念仏を唱えることも、難しいと書かれています。

阿弥陀経の最後でも、難信の法と述べていますが、その理由を推測します。これは、親鸞聖人の教えを伝えていく上で、常々自分でも感じることです。

- ・ 教えの実証的な説明が難しい
- ・ 自力と他力の区別がつけづらい（他力に専念すると自力になりやすい）
- ・ 他力の信心は、念仏をここまでやれば大丈夫とか他人より自分の方が救われたいという自惚れが生じやすい

こうした場合には、阿弥陀仏のお心を問うこと、不遜ではありませんが、阿弥陀仏の立場に立って衆生を救うために何を考えるかということに、心を致してみます。

「五濁悪世に生き、殺生をしないと生きていけない煩惱の多い凡夫が浄土に生まれるには、代わりに修行をして仏になった私（阿弥陀仏）」

の名前を呼べば、必ず救いとうとうという願が成就したことを信じなさいと伝えたい。」こう思っているのでしょうか。

しかし、小さい時から「氣を付けよう、甘い言葉と暗い道」などという標語で育ってきた我が身からすると、こんな簡単なことで極楽浄土に行けるのだろうか、軽々しく信じる事ができない自分があるわけです。

難信のもう一つの意味として、「信じがたいほどのありがたい教え」ということだと考える人もいます。阿弥陀経の最後に、舍利弗をはじめ天人阿修羅などが、教えを信じ、歡喜して、お礼を言って立ち去ったと書かれていることを理由にあげます。

【おわりに】

仏教を信じようとして經典を読んでいる人やこれから信じようとしている人に、「この考えは、信じるのが難しいよ」と宣言するのは、いかなるものかと、若いころには感じました。難しいというのであれば、易しく説明してほしいと不満に感じていました。最近、それを解説するのが仏門に入った僧の仕事なのではないかと、考えています。

最近、地震や水害で家や家族を失った人を見て、かわいそうと思うことと、不遇な境地から立ち直って立派だとおもうことが相俟っています。

生きることが困難な時でも一生懸命生きると、自然と感謝の気持ちが現れるようにも思えます。

今の私の立場からすると、先達に抱いていた「何となく不満」を、自分のものとして、極楽浄土への往生の気持ちを深めていこうと考えています。

私は、毎週木曜日に、声明学園というお経を勉強する学校に通学しています。そこに、会社を定年して得度した一年生が通っているのですが、「声明だけではなく仏教学なども勉強しないと悟りを得られませんか？」という問いがありました。私を含めた上級生は、「称名念仏」が正業で、あとは助業と答えました。念仏以外では救われないという教えも伝えました。

でも、この世で往生が定まるには、念仏に加え、迷うことなく一心に念仏するという気持ちの裏付けが必要と私は感じているのも、正直なお話で、念仏に専念して極楽往生できると信じるのは本当に難しいと感じています。

本日は、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。